

現場重視の農学教育

福島大学農学系教育研究組織設置準備室室長 生源寺眞一

医学の分野では、つねに患者と向き合う姿勢が維持されている。生産の現場とのつながりを大切にしている点では、工学にも共通する面がある。これに対して今日の農学はどうだろう。農業との接点があまりにも稀薄ではないか。

非常に印象的なお話だったので、今でも鮮明に記憶している。(財)農学会会長の長澤寛道先生の挨拶の中のひとことである。たしか2016年3月に開催された農学会と日本農学アカデミー共催のシンポジウム「食料は足りるのか」の場だったと思う。たしか、だったと思う、などと書き綴ったが、このあたりの記憶はいささか曖昧で、ひょっとすると別の会合でのご挨拶だったかもしれない。けれども、中身に間違いはない。

長澤先生は、知る人ぞ知る生物有機化学の第一人者で、東大農学部長時代の2012年には紫綬褒章も受章されている。文字どおり専門を極めた先生の発言だけに、農学に対する重い問題提起として受け止めたわけである。ところがここへ来て、私自身が、たんに警鐘として受け止めるだけでなく、自分たちの問題として農学のあり方を考え直す立場に置かれることになった。

この4月に福島大学に着任した。2019年春の開設を目指す農学系の教育研究組織の準備をお手伝いすることが仕事である。現時点の構想では「食農学類」の名称で、1学年100人程度の学生と40名弱の教員を予定している。また、学部の後半は履修コースに分かれることになる。具体的には「生産環境学コース」「作物・栽培学コース」「食品科学コース」「農業経営学コース」の4つが想定されている。

生産を囲む環境、生産の現場、食品加工と流通、そして全体をカバーする経営判断といったかたちで、食の流れを強く意識したコース設定である。ここには実践性を重視する食農学類の基本理念が色濃くにじみ出ている。言うまでもなく、実践性を重視するテーマには、東日本大震災と福島第一原発事故からの復旧・復興という、まことに重い課題への挑戦も含まれている。

カリキュラムも実践性重視の姿勢を反映している。その代表例が、2年次の後半から3年次に開講

する農学実践型教育である。県内7カ所ほどの現場をフィールドに、課題の分析から解決策の提案に至るまで、農業や食品産業などとの密接な交流のもとで学習機会が提供される。この科目は学生・教員ともに履修コース横断型のメンバー構成を想定しており、専門分野を超えた学際的なコミュニケーションのレベルアップも意識している。

本来の農学は課題解決への貢献を第一義とする学問として発展してきたはずである。その原点に立ち返ろうというわけである。むろん、現時点ではプランの段階であり、具体化には課題山積であることも承知しているつもりだ。けれども、ことがらの本質という意味では、現場との密接な交流と高い専門性の確保をいかに両立させるかが問われているように思う。学生も教員も多忙な日々を送ることになるに違いない。時間資源を有効に活用する心構えと技術を身につけることも大切だ。

そのうえで強調しておきたいのは、現場の具体的な現象や取り組みには、それがいかに個性的であろうとも、地域や国を超えた共通の要素が含まれていることである。自然科学の農学分野であれば、目の前の現象を最新の研究成果から理解できるケースが多いはずである。そこからサイエンスのパワーを実感することにもなる。この点は社会科学的な農学にもあてはまる。人間の経済行動には共通の合理的傾向があり、それは身近な農業にも見出される。あるいは、ゲーム理論を援用しながら地域資源の維持管理ルールをロジックを解明したオストロムの業績を念頭に置くならば、地域固有の慣習にも歴史と国境を超えた共通項が存在する。

現場と密着した農学教育と高い専門性の農学教育を両立させるための鍵は、個別・具体的なケースから普遍的な要素を読み取る点にあるのではないか。教育だけではない。このような基本姿勢は研究を進めるうえでも大切だと思う。

